

現代日本語交感発話における慣用表現
—タ形の使用制約とスタイル分化に着目して—

しょう けつ 潔 (北海道大学大学院)

1. はじめに

本発表は、交感機能を持つ交感発話の慣用表現を考察対象とし、タ形の使用有無、スタイル分化有無の現象を分析する。ここでいう慣用表現は交感機能を持つ慣習化の高い表現を指すものである。人に出会った時の「こんにちは」「おはようございます」などのあいさつ言葉や慣習化した感謝の言葉「ありがとうございます」、謝罪の言葉「すみません」の一類がその例である。本発表は、意味論的、統語論的かつ語用論的視点を合わせて検討を試み、以下の二つの問題点に言及する。

- ①交感発話の慣用表現において、タ形を使用できるものと使用できないものとはどのような区別があるのか。そして、使用できないものは、なぜタ形を持たないのか。
- ②慣用表現のスタイル分化はどのような役割を果たすのか、また、どのような特徴を持っているのか。

2. Jakobson (1960:3-7) の言葉の六機能

ロマン・ヤーコブソンは言語記号による伝達行為（コミュニケーション）が成立するための基本的要素として、発信者（話し手）、受信者（聞き手）、そしてメッセージ（記号による表現）およびそれによって伝えられる内容のほかに、発信者と受信者に共有されている記号の組織的体系（CODE）、および記号による伝達が成立するための条件としての物理的・心理的接触（CONTACT）を加えた。結局六つの要素が伝達行為には必要と認められたわけである。そして、この六要素の各々に対応する六つの機能を、言葉の作用として考えている（Jakobson, 1960、鈴木 1975）。

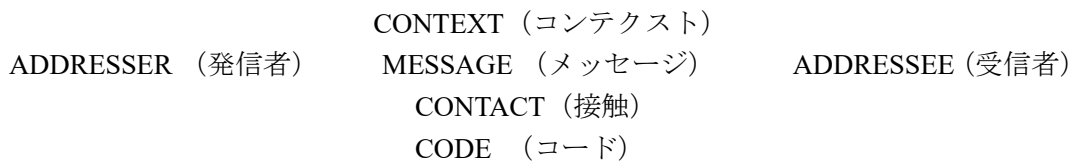


図1 ヤーコブソンの六要素 (Jakobson, 1960:3、訳は発表者による)

そして、各要素に対応する機能は次のようにある。コンテキスト¹→＜指示的機能＞：ある内容を表示する。発信者→＜（感情）表出的機能＞：話し手の気持ちがそのまま表出される。受信者→＜他動的機能＞：他者に対して働きかける。メッセージ→＜詩的機能＞：美的機能。物理的や心理的な接触→＜交感的機能＞：相手とのコミュニケーションの経路の存在を確かなものにするという営みである。コード→＜メタ的機能＞：言葉を指す言葉。

¹ この「コンテキスト」という用語は、「事物・対象」とでも言われている（鈴木 1975:70 参照）。通常の「文脈」という使い方からはいくらかずれがあると感じられよう。要するに、「メッセージ」は伝達内容を表すために、何らかの記号による表現であるが、「コンテキスト」は伝達内容というか、表示される事物・対象のようなものであるというふうに理解できよう。

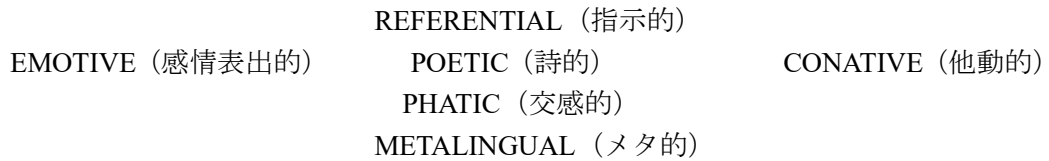


図2 ヤーコブソンの六機能(Jakobson,1960:7、訳は発表者による)

上記の先行研究を踏まえると、人間の言葉（発話）には、いくつかの機能を同時に持つことがあると分かる。また、交感的機能は、具体的な情報伝達としての目的より、話し手と聞き手のコミュニケーションが安定的に遂行できることに重きを置く作用であると考えられる（加藤 2004:112）。

3. 分析

現代日本語での過去形はタ形で表している。タ形は、命題内容の過去の事態、完了アスペクトを表すものである。タ形を持たない表現とは、タ形を使うと不自然になるものである。上記で述べたように、交感発話の典型的な例はあいさつ言葉である。あいさつ言葉は慣習性が高い決まり文句であるため、交感発話の慣用表現として扱う。以下、甲斐(1984:190-191)、肖(2019:11-15)を参照した上で慣用表現を整理し、タ形の持つものと持たないものについて考察していく。

3.1 タ形の使用有無について

慣用表現には、タ形が使用できる表現と使用できない表現、タ形が使用できる表現の中にさらにタ形のものとは異なるものがある。次の例を挙げる。

<タ形の使用ができない表現>

(1) 人に出会った時

- おはようございます。
- こんにちは。
- こんばんは。

(2) 人と別れる時

- さようなら。

(3) 寝る前

- お休みなさい。

(4) 家の出入りをする時

- (自分が外出する) 行ってきます。
- (家族を見送る) いってらっしゃい。
- (自分が帰宅する) ただいま (*「ただいま帰りました」の場合は除く)。
- (家族が帰宅する) お帰りなさい。

(5) 他家を訪ねた時

- (訪問する時) ごめんください・失礼します。
- (辞去する時) 失礼します。

(6) その他

- どうも。
- よろしく/よろしく申し上げます。

—— いつもお世話になっております。

<タ形が使用できる表現>

(7) 食事をする時

—— いただきます。

—— ご馳走様です/ご馳走様（でした）。

(8) 他家を訪ねた時

—— お邪魔します/お邪魔しました。

(9) 感謝の表明

—— ありがとうございます/ありがとうございました。

(10) 謝罪の表明

—— 失礼しました。

—— すみません/すみませんでした。

(11) 慰労

—— お疲れ様です/お疲れ様でした。

(12) 祝福

—— おめでとうございます。

〈タ形の使用ができない表現〉において、(1) のような慣習化の高い表現は、本来の表現と意味をもって現在の決まった言い方に省略したものである。「おはよう」は、「本来早く起きだしたねと、相手の勤勉を感嘆する意味でありました」（柳田 1964:91-92）。「お早く起きになりまして、ご健康でおめでとう」、「よくおかせぎになっておめでとう」という意味を含む場合もあります」（樋口 2007:49）。また、「こんにちは」は「「今日はよいお天気です」などの後ろの部分が略されたもの」（デジタル大辞泉、JapanKnowledge Lib）である。(2) の「さようなら」も「然様（さよう）ならば（それならば）」に続く、「ごきげんよう」「のちほど」などほかの別れの表現と結びついた形で用いられ、次いで近世後期に独立した別れのことばとして一般化した」（日本国語大辞典、JapanKnowledge Lib）。

これらの表現は定着したことによって、情報性の低いあいさつ言葉になったともいえるだろう。なぜタ形を使用できないのか。前述である通り、タ形は現代日本語で時制を表すものである。時制は、命題と話し手の「今、ここ」からの時間的位置関係を示す文法概念であり、現在時制は命題内容を現在の事態として、過去時制は命題内容を過去の事態として表す（原田 2014:140）。なお、Jakobson (1960) の言語の六機能を踏まえると、言葉の情報性が低くなるというのは、事物・対象に対する指示的機能（叙述・描写する機能）が弱くなるということである。考えられる理由としては、これらの表現の主要な目的は人間の接触（CONTACT）という要素に焦点が当てられ、交感機能を果たすことが求められるからである。

つまり、言葉における六機能はすべて強く果たされるのではなく、どの要素に焦点が当てられるかによってそれと対応している機能が際立ち、果たされるのである。「おはよう」「こんにちは」のようなタ形を持たない表現では、記述的情報が省略され、事物・対象を叙述する力が弱くなる。要するに、指示的機能が弱くなるのである。また、記述的情報が省略された原因は、当該発話は事物・対象を表示するというより、コミュニケーションの経路（つまり受取側との物理的・心理的接触）を営むことに重きを置くことにある。事物・対象を叙述する力が弱くなると、時間的距離を持つ過去の事態を表示することも不自然となる。言い換えると、これらの例は交感機能が強いいため、指示的機能が抑えられ、伝達内容の情報が薄れて、

形式化された表現はタ形を持たなくなる（若しくは、タ形を使用すると不自然になる）と考えられる。

それに対して、タ形を使用できる表現では、(7)（食事した後）の「ご馳走様でした」は、「よい食事を提供していただきまして、ありがとうございました」という意味を表し、(8)（他家から辞去する時）の「お邪魔しました」は、「この度の訪問で、お騒がしました」という意味を表すのである。これらは、いずれも慣習性の持つ指示的機能（事物や対象に対する叙述・描写）が果たされる表現である。それに、感謝・謝罪の表明、慰労・祝福の表現は、他人に対して「謝意を表す」、「申し訳ない気持ちを示す」、「聞き手の苦労に対するねぎらう」、「聞き手の好運に対する喜び」の表現である。これらは話し手の感情を表現したり、聞き手に対して働きかけたりしている。発話内力があり、慣習化した言語形式によって相手に感謝、謝罪、慰労、祝福する行為を実現している。ヤーコブソンの六機能からいうと、〈指示的機能〉(REFERENTIAL)、〈感情表出的機能〉(EMOTIVE)と〈他動的機能〉(CONATIVE)を持っているものである。とはいえ、これらの表現は人間関係の構築、安定的な会話状態を保持することにも役立っているため、〈交感的機能〉(PHATIC)も持っている。このように、いくつかの機能が同時に持っているため、〈交感的力〉²がある程度弱くなるのである。

さらに詳しくみていくと、タ形と非タ形の間にまた差異がある。(7)は、食事をする前に「いただきます」と言って、食事を終了した後「ご馳走様でした」ということができる。「ご馳走様です」の場合もおいしい食べ物が出されて、食事をする前に用いられるものである。また、(8)は家に入る前に「お邪魔します」と言って、訪問が終了して、家に出る時に「お邪魔しました」と言う。つまり、タ形はアスペクト的完了、動作や事態が終了したことを表すために用いられるのである。しかし、「感謝」「謝罪」「慰労」は、非タ形の場合に事態が終了するかどうかにかかわらず用いられるが、タ形の場合は明らかに終了したことでないと用いられない。例えば、感謝を表す「ありがとうございます」は、相手に現在の事象や過去の事象に関して謝意を表す場合に用いられるが、謝意を表すというよりただ交感機能を働かせるために用いられる場合もある。一方、「ありがとうございました」は、明らかに完了した出来事に関して謝意を表明する場合にしか使わない。その他、「失礼します」「お疲れ様です」も同様である。上記の分析によると、非タ形はコンテキスト(CONTEXT)を表示する力が弱いため、コンタクト(CONTACT)に焦点を集中することができる。一方、タ形の場合はコンテキストを表示する力が強いため、コンタクトの表示力、いわゆる、交感的機能がそれなりに弱くなるのである。

3.2 スタイル分化の有無について

スタイル分化とは、丁寧体と普通体の分化があるかどうかのことを指す。慣用表現では、「こんにちは*」「こんばんは」「さようなら」「どうも」のような表現は文体の分化がないとみられる。ただし、近年、「こんにちはです」「どうもです」の若者言葉がみられる。本節では、文体に関する仕組みとそれぞれの役割に対して考察していく。次は、スタイル分化できる表現と分化できない表現、および「デス」を付加して若者に用いられる表現を挙げる。

〈スタイル分化できない表現〉

(13) さようなら

(14) ごきげんよう

² 「交感的力」は、本発表で作った用語であるが、交感機能の度合いを指している。

- (15) こんにちは
- (16) こんばんは
- (17) どうも
- 〈スタイル分化できる表現〉
- (18) おはよう/おはようございます
- (19) ありがとう/ありがとうございます
- (20) すまない/すみません
- 〈デス付加表現〉
- (21) こんにちは>こんにちはデス>こんちはっス>ちはッス
- (22) どうも>どうもデス
- (23) すみません>すみませんデス

3.2.1 文の成分

上記の例において、スタイル分化できない表現は一部あるが、その仕組みを分析していくと、「文の成分」に近い表現がみられることが分かる（甲斐 1984:182 からヒントを得た）。

タ形の有無を分析したときに述べたように、「こんにちは」はもともと、「今日（こんにち）はご機嫌いかがですか」「今日はよいお天気ですね」などの表現の後半が略され、昼間に人に会った時のあいさつとして定着したものと言われている。表現の後半の部分が省略された後、「こんにちは...」という最初の部分だけ残存して定着したと考えられる。この最初の部分は主語に近い表現である。

「おはよう」は前述であるように、もともと朝、自分より先に出ていた人に対して、「お早いですね（お元気で何よりです）」という意味を込めて「お早う（おはやう）お越しで」などと声をかけていたのが始まりとされるものと言われている。「お早い」をウ音便して、「おはよう」となったと考えられる。また、「ありがとう」は形容詞「ありがたい」の連用形「ありがたく」のウ音便化したものである。「ありがたい」は「ありがたいです」のように「デス」を付けて言う場合もある。よって、「おはよう」「ありがとう」は述語に近い表現である。

さらに、「さようなら」も前述であるように、「然様（さよう）ならば（そういうことならば）」に続く、「お別れですね」「ご機嫌よろしく」などのような言葉が略され、さらに「ば」もとれ、「さようなら」の形に定着したものと言われている。これは接続詞に近い表現である。

加えて、「どうも」は、「①（打消表現を伴って）いろいろと行為をしてみても、またあり得る状態を考えた上でも否定される気持を表わす語。なんとしても、どんなふうにも、どう考えてもという意味合いがある。②いろいろしたり考えたりして結局認める気持を表わす語。感動を伴うことが多い。何とも。いやはやの意である」（日本国語大辞典、JapanKnowledge Lib）。それが時代の流れとともに、「どうも」と簡略化され、「どうもありがとう」「どうもご無沙汰しておりました」「どうもすみません」など、あいさつの時や謝意・詫びを表すときに使用され、その意を強調するようになった。その他、「どうもどうも」と重ねて用いるものもある（ibid.）。「どうも」の由来を踏まえると、修飾語に近い表現だととらえられる。

上記の考察を見ると、主語に近い表現、接続詞に近い表現、修飾語に近い表現はスタイルの分化ができないのも理解できるだろう。それに対して、述語に近い表現は「ます」や「ございます」を付けることによってスタイル分化ができるようになった。

3.2.2 スタイル分化について

「おはよう」と「おはようございます」のようなスタイル分化できる表現の使い分けは二つの要素と関わっている。①丁寧体でマークすることによって、直接やり取りをしている「顕在的聞き手」への配慮、②場面を構成している「潜在的聞き手」への配慮分散(呉 2020:38-39)。①は聞き手を高める待遇、②は発話場面に品位を持たせる配慮を示す。裏返せば、普通体は聞き手を高めない中立的な待遇機能を果たし、くだけた会話場面において聞き手との距離を縮める機能を果たすものである。

また、デスを付加する表現「こんにちはデス(その短縮形も含む)」は、近年若者に使われる「ネオ敬語」(呉 2020)である。この種の敬語は、本来スタイル分化ができない表現の上に丁寧さを付けることによって、くだけた会話場面で聞き手へ敬意を表示するとともにやわらかい感じを与える(呉 2020、中村 2020)。その他、デスを付加することによって、スタイル分化ができるようになり、相手との距離を柔軟に調整できるため、種々の会話場面への適応性も高くなる。

4. まとめと今後の課題

本発表は、交感発話における慣習表現のタ形の使用有無とスタイル分化有無の仕組みとその役割を分析した。交感機能を中心に持つ表現は、言語の指示的(referential)機能が抑えられ、時間的距離を持つ過去の事態を表すタ形の使用は制約される。スタイル分化は文の成分と関連しているが、スタイル分化できる表現は聞き手や発話場面への待遇機能を持っている。これからは、距離の調整というポライトネスの観点からタ形と非タ形の使用に関する分析を深めることを考えている。

参考文献

- 加藤重広(2004)『日本語語用論のしくみ』研究社
- 甲斐睦郎(1984)「現代日本語のあいさつ言葉について」『国語国文学報』42、177-190、愛知教育大学国語国文学研究室
- 原田依子(2014)「時間の把握と現実性判断の相関に関する一試論:「ありがとうございました」を“Thanked you”と言わないのはなぜか」『総合文化研究』12、139-144、東京電機大学総合文化研究室
- 樋口清之(2007)『日本の風俗 起源がよくわかる本』大和書房
- Jakobson, R (1960) “Linguistics and Poetics”. In :Thomas A. Sebeok(ed.) *Style in Language*, 350-377, John Wiley and Sons, New York.
- 中村桃子(2020)『新敬語「マジヤバイス」:社会言語学の視点から』白澤社
- 呉 泰均(2020)『日本語聞き手待遇表現の社会語用論的研究』北海道大学出版会
- 鈴木孝夫(1975)「あいさつ論 あいさつの言語社会学的考察」『ことばと社会』、67-86、中央公論社(初版:『言語生活』1968年1月号、筑摩書房)
- 肖 潔(2019)「あいさつとあいさつ表現の判断基準及び分類に関する考察:日本語の視点をもとに」『研究論集』19、233-243、北海道大学文学院
- 柳田国男(1964)『毎日の言葉』角川学芸出版
- 〈データベース〉
- JapanKnowledge Lib 北海道大学附属図書館データベース、ウェブサイト:
<https://japanknowledge-com.ezoris.lib.hokudai.ac.jp/library/> (アクセス日付:2021年9月)